

《選評》 いしい しんじ (作家)

まずは海外部門から。「外国生まれの方が、日本語で小説を書こうという、その勇気がすごい」との声が、選考会でいくつもあがった。ほんとうにそうだと思う。

『Cat under the moon』は幻想譚で、鴨川沿いのパブ、八坂神社など、著者がじっさいに馴染んでいるらしい場所の空気がよく書けていた。ただ、「じつは幻だった」というオチは、前半の現実が生々しく書けていてこそ効いてくるものだ。この作品には前半から幻なのか現実なのか曖昧にすぎるところがあり、ラストに鮮やかさが欠けるのが残念だった。最初から最後まで幻想・ファンタジーのみの、ごく短い話を書いてみてはどうだろう。



『線対称な家族』は、読みはじめてすぐ、ふしぎな距離感にひかれた。父ひかると高校生の二藍の関係が、たえず伸び縮みしていて、まるで一定しない。最後にその理由が判明するが、その理由が明かされる部分より、関係の伸び縮みを描写している箇所のほうが、読んでいてたのしかった。ことばについて独特の感性をもった書き手、と感じる。ストーリーの構造に考えをこらすより、ある家族の日常を、すなおに、淡淡と描いていったほうが、その感性がいつそう生きるのでは、と思った。

中高生部門も、どれも懸命に、時間の波にとびこんで泳ぎぬいたのがよくわかる。

『煌めき』は、瑞々しい表現に満ちていた。十代にしか使えないことば、つかめない色、かたち、というものがある。高校生たちの心境は、とてもよく書けている。彼ら彼女らを受け入れる教師の立ちようは、少し散漫に感じた。ひとりひとりに向かって立つ姿は、もちろん、それぞれの目から違っていてもいいのだが、人間として一本の芯が感じられるよう、最後まで書ききってほしかった。「場面」を書くだけでなく、そこにいる「人間」がほんとうに生きていないと、生きた小説として、読者の前に立ちあがってこない。

『マスクの秘密』。掌編、超短編小説を、よく読まれている書き手だな、と感じた。ストーリーを展開させる、なにげない「つなぎ」、もしくは「書かれないこと」の表現が、とても自然で、つまり、とても巧みだ。バスのなかの出会い、という書き出しから、ラストがどうなるか想像はできる。そこまで読者をストレスなく連れていけるかどうか、掌編の書き手の力量にかかっている。その力量が著者にはまちがいなくあった。月乃の母の、小説内でのさりげない立たせ方が、とりわけ印象にのこった。

『十六畳の宝箱』。とても好きな作品だった。著者がこの作品を愛し、ていねいに、ていねいに書き進めていることが伝わってくる。多数でてくる人物の、それぞれの声もたしかにちがってきこえる。とりわけ、語り手である「僕」。その場所から一步も動けない無念さ、その場所にいたからこそ出会えたよろこび。ひとつだけ、ポイントをあげるとするならば、ストーリーの都合上、語り手が別の人物に移る場面がある。僕は、自分がもしこのような設定の作品を書いたなら、語り手は最後まで「僕」で一貫させたと思う。「僕」のその場面での語り方を考え、ずっと「僕」に語らせたと思う。重心を一点にしぼらないと、ぶれが生じてしまうのは、小説も建物も同じことだ。

最後に一般部門。力のある作品がそろった。

『衣通姫の恋』。ことばで組まれた細密細工のような作品。一行ずつ、ひとことずつ、追っていくのが目にも楽しかった。時代考証、ということばが陳腐に思えるくらい、それぞれの場面がごく自然に浮かびあがる。京都の町に、ほんとうに、このような時代があったと、知識でなく現実として信じることができる。「歴史」と「物語」は、仏語では同じ単語"Histoire"であらわされる。「歴史」の力を著者は作品につなげた。「物語」として、最後に少し書き急いでしまった観がある。時間の流れを信じ、身をまかせて、ゆったりと書いていってほしい。

『紫式部誕生』。題名からしてすごい。イタロ・カルヴィーノが書きそうな、したり顔の愉快的ほら話。エピソードとエピソードのつながりが曖昧で、全体をつうじて散漫な印象をうける。とはいえ、著者が前へ前へ、物語を進めていく、その信念・勢い・作品への愛着が胸に飛び火し、ページを先へ先へ、息をつめて読んでしまう。最後のどんでん返しはもう、笑ってしまうくらい爽快だった。文楽の舞台をみているように感じた。じっさい、人形劇に向いているかもしれない。

『太秦——恋がたき』。手練れの書き手、と読みはじめてすぐ感じた。余計な引っかかりやストレスがっさいない。「自己表現」みたいな、厄介な枷からも解放されている。物語がごくすなおに、陽に温められた水のように流れてゆく。読みながら、こんなにも映画の町だった、と京都をあらためて見直している。映画人たちの息吹がありありとページから浮かびあがる。小説として、圧倒される場面、生唾をのむ場面は、正直、なかったかもしれない。ただしかし、映画・フィルムを軸に、この町の時間を巻き戻してみせてくれたその手腕には、こころから敬意を表したい。

『カワリモン』。読んでいる途中、可笑しくてしかたなかった。大学生の、えんえんにダラダラ伸びていき、どこへ着地するかわからない時間と、その時間を生きるほかない色あせた焦燥感。山のなかで千春が遭遇するなにかが、この時間と焦燥感に、効果的に接続されていけばなおよかった。小説の終わりは、急速に収斂してしまうが、ただそれも、学生寮の時間の苦い終わりが、ごく自然にうつりこんでいるからなのかもしれない。

『もう森へは行かない』。何度読んでも圧倒される。企んで書いたのでない。こう書くよりほかなかった切実さがギンギン伝わる。著者のその書きかた（書かされかた）は、主人公イチの生きかた（生かされかた）と、影法師のように重なる。イチもこのように生きるほかなかった。だからこそ哀しい。それは人間なら、どんな境遇に生まれ落ちてても同じことだ。娘のキクも。赤子のクウも。哀しすぎる、だからこそ愛おしい。この作品を「暗すぎる」という声が選考会であがったが、真逆だと感じた。この小説には、生命の光が汪溢している。倫理も、法律も、常識も、生のままのいのちには関係ない。だからこそまぶしい。だからこそ美しい。すごい作品だ。ご受賞、おめでとうございます。

《選評》 原田 マハ (作家)

第一回京都文学賞の大賞受賞作が松下隆之介さんの「もう森へは行かない」に決まった。まずは心からのお祝いを申し上げたい。

京都という街は、そこで暮らす市民のみならず、多くの人々にとって、ある種の特別感がある場所ではないだろうか。私自身、関西で大学時代を過ごした頃から、京都は、憧れの人のような、永遠にかなわない片思いの相手のような存在だった。そんな京都を舞台・題材にした文学賞の選考委員を務めるのは緊張もあったが、応募者の皆さんが「京都」といういい意味での難物をどのように自分のものとし、物語を成立させるのか、大いに興味を持って候補作を読ませていただくことができた。どれも大変な力作で、京都の情景をあますところなく盛り込んでいるものが多く、京都という街の魅力をこれほどまでにさまざまに小説で楽しむことができたのは、ひょっとすると人生の中で初めての体験だったかもしれない。



選考する際に重きを置いた点は三つある。第一に、「京都」を魅力的に描けているか。第二に、第一回京都文学賞としてふさわしい風格があるか。第三に、純粹に小説として面白い。これらの自分なりのスコープを胸に、候補作を読ませていただいた。

読み進める中で、藤田芳康さんの『太秦——恋がたき』が私の中では強く残った。現代と戦前・戦中・戦後の女性の一代記的な内容で、構成もしっかりしている。映画作りの黎明期に関わった夫との関係性が情感たっぷりに描かれ、最後まで引っ張る力があつた。ただ、映画に関するうんちくがやや冗長で説明書きのようになっており、フィクションの飛躍を抑えてしまっていたのが残念だった。ただ、第一回京都文学賞にふさわしいテーマと内容のように受け取った。

一方で、松下さんの『もう森へは行かない』は、平安時代の盗賊が主人公。殺戮や盗み、吊い、人間のどろどろした営みが描かれ、全体的に暗澹としたトーンで物語が進む。が、主人公の前に一人の僧侶が現れるところで一気に転調する。この僧侶こそ念仏で衆生を救うことになる空也上人。彼の唱える念仏が人々の心に信仰の種子を落とし、主人公もやがて改心して人を救う側に転じる。

平安時代といえば華やかな王朝文化に取材したくなるものだが——そしてその方がひょっとすると楽に書けるかもしれないのに——作者はあえてこの時代の暗部に切り込んでいる。その大胆さと勇気が抜きんでていた。また、着眼点が大変ユニークで、他に類を見ないものだったことも、選考会の中では高い評価につながった。

実のところ、私は候補作に第一回京都文学賞としての風格をわかりやすく求めていたことを告白しておかなければならない。たとえば、はつらつとしていて、読んでいて楽しい気分になるもの——というような。しかしながら、小説として最も重要なのは、表面的な感覚よりも、個性があるか、これからもずっと書き続ける骨太な資質があるか、ということだと気づかされた。松下さんの作品にはその二つが備わっている。どんどん書き続けてほしい。松下さんのさらなる跳躍を見てみたい。次なる展開が今から楽しみだ。

京都文学賞は「中高生部門」と「海外部門」の二部門が設けられているのが特色である。中高生部門ではそれぞれに瑞々しい感性の作品を読ませていただいた。中でも『十六畳の宝箱』は幕末がテーマとなっていて、歴史上の登場人物が生き生きと描かれていて大変面白く最後まで飽きさせなかった。「海外部門」でも2候補作とも現代の京都を舞台にして時流を得たテーマを取り上げていたことが目を引いた。それにしてもこの二部門に挑戦したのは、十代の書き手、外国人の書き手である。文章を書く技術もさりながら、最後まであきらめずに書き切る粘り強さ、持続力が全候補者にあつた。そのあきらめない力が、今の時代には必要なのだと思う。ゴールを達成した応募者の皆さんへ拍手を贈りたい。

《選評》 校條 剛 (評伝作家)

第一回のこの賞の募集期間は、四ヶ月ほどしかなかったのですが、三部門への応募総数は500篇を超えました。私は前々職の出版社で30年近く新人賞に携わりましたが、これほど多くの応募数は体験していません。京都の「魔力」に脱帽です。ただし、数が多いことがすなわち水準の高さとイコールではありません。今回、「一般部門」のうち、二作が平安王朝もの、一作が平安時代もの、あとの一つは太秦の映画もの、もう一本はお決まりの学生ものでした。京都というと、皆さんが最初にイメージする題材が出揃った印象です。私が求めたいのは、現代京都の日常生活から生み出されたような作品です。次回にはそういう新鮮な京都小説を期待したいと思います。さて、「一般部門」では優秀賞『太秦——恋がたき』と最優秀賞を獲得した『もう森には行かない』の二作の争いとなりました。『太秦…』は、無声映画の時代から現代に至るまでの映画の歴史を背景に恋と人情を巧みな語り口で読ませる作品でした。一方、『もう森…』のほうは、読者に逃げられそうな肩肘張った出だしでしたが、だんだんと油が行き届いてくると、もう一気読みが止まらないという、リズム感に優れた作品でした。甲乙付けがたい二作でしたが、『太秦…』は、『もう森…』よりも新しい時代を背景とした作品なのになぜか古くさい話を聞かされている思いが消えません。作者の気持ちが現代から離れているからではないでしょうか。平安期の時代を背景にしている『もう森…』のほうが、現代を感じさせるのは、過去の時代の人々を、現在ここにいる人たちとしてヴィヴィッドに描こうという作者の現実感覚からくるものだと考えられます。『もう森…』は、五作のなかで主人公が「変わっていく」過程を描くことに唯一成功しており、それゆえ読後の感動は頭抜けていました。一般部門での他の三作に言及しましょう。まず『カワリモン』は、ファンタジー要素を取り入れるなどの工夫は見られますが、従来の「モラトリアム大学生」ものの枠を超えることは難しかったようです。男女二人の主人公たちを一度も交差させなかった意図も理解できません。『紫式部誕生』は、二次選考のときの高評価作品でしたので期待していましたが、発想の突飛さを読者が納得するような展開に持っていきませんでした。清少納言に源氏物語を書かせるというこの作品のアイデアを生かすには、さらに説得性を持たせるような工夫が必要だったでしょう。『衣通姫の恋』は、少女期の恋の思い出にすぎる小野小町がいきなり男女差別に憤るフェミニストに変じる過程が描かれていません。

次に「中高生部門」です。最優秀賞の『マスクの秘密』は、ひたすら軽いショートショートです。マスクに隠された秘密を知った主人公が驚かないことに読み手の私の方が驚きました。読者の想像をいい意味で裏切る技を見せてくれる作品でした。ほぼ同数の票を集めて競った優秀賞の『十六畳の宝箱』は、家屋の梁を語り手にするという方法で坂本竜馬の死の前後を描こうとする意欲作でした。ただ、内容はすでに知られている歴史的事実のみで、小説的なふくらみが感じられないのが残念でした。『煌めき』は残念ながら大方の支持を得られませんでした。「不幸な世界を変えたい」という作者の必死な願いを作品に生かし切れていない未消化感が残りました。「海外部門」の二作『線対称な家族』『Cat under the moon』は、受賞には至りませんでした。日本語で必死に物語ろうとする努力を買って、規定にはない「奨励作」とさせていただくことにしました。

